

## 近代文学の中の仙台

## Sendai City in Modern Japanese Literature

Koichiro CHIBA

千葉 幸一郎

はじめに — 仙台という街 —

仙台市は宮城県の県庁所在地であり、十一番目の政令指定都市である。その歴史は慶長五年（西暦一六〇一）伊達政宗が青葉山に城を築き始め、当地の名を「千代」から「仙台」へ改めたところから始まる。以後、江戸時代を通じて仙台は伊達六二万石の城下町として勇名を馳せ、また維新後も東北最大の都市として発展した。さて、仙台市の市制百二十周年を記念して制作された『一〇〇年前の仙台を歩く―仙台地図さんぽ』（せんだい、二〇二〇）アニバーサリー委員会、二〇〇九・五）という書籍に、仙台市は巻頭広告を載せて次のように謳っている。自画自賛の風がないでもないが、簡にして要を得た説明だと思われるので、引用したい。

明治も半ばの二二年、仙台は全国三八都市の一つとして市制を施行しました。当時の人口は八六三三三人。世帯数は一六八〇六世帯。やがて軍事・司法・運輸・通信など地方統轄のための国の機関や、東北帝国大学（現東北大学）など重要な教育機関が設置されました。島崎藤村が教鞭をとり、魯迅が学ぶ東北の文教都市は、いつしか「学都仙台」と呼ばれるようになりました。「中略」平成元年には東北地方初の政令指定都市に移行し、また平成一年には人口一〇〇万人を突破。新しい産業や文化を生み出し、数多くの魅力的な側面を持つ街へと育っており、美しい環境や活力を持続できる二一世紀型の都市づくりを進めています。

明治二二年（一八八九）四月一日に市制施行された際の仙台市の人口は、今の大和郡山市の人口八七八〇二人にほぼ等しく（ちなみに言う和大和郡山市の現在の世帯数は三七六三二戸、平成二八年八月三一日現在）、直近の人口は一〇八四九八九人ということである（平成二八年九月一日現在。仙台市の公式ホームページによる）。

ところで、先の引用に「文教都市」「学都仙台」という表現があったが、市制を敷いた前後、市内には多くの学校が創立された。まず明治一九年（一八八六）にミッシェン系の学校が相次いで設立されている。仙台神学校（明治二四年九月に東北学院と改称）、宮城女学校（宮城学院の前身）、東華学校（明治二五年廃校となり、同年、宮城県尋常中学校として再スタート）の三校がそれである。このうち仙台神学校には岩野美衛（詩人・小説家、岩野泡鳴。淡路島の生まれ、一八七三―一九二〇）、宮城女学校には星良（文筆家、相馬黒光。仙台生まれ、一八七六―一九五五）、東華学校には児玉伝八（詩人、児玉花外。京都生まれ、一八七四―一九四三）、真山彬（詳細は後述）が学んでいる。そして、同年四月の第一次中学校令（明治一九年勅令第一五号）公布によって全国に五つの高等中学校が設置されることになり、仙台には翌二〇年四月に第二高等中学校が設立された（略称、二高。明治二七年の高等学校令によって第二高等学校へ改称）。同年、東北本線の上野―仙台間が全線開通したこともあって、二高

には全国から優秀な学生が大勢集まって来た。ここでは文学者に限定して、同校に席を置いた主な人物を挙げてみる。

- 高山樗牛（一八七二―一九〇二）文藝評論家。山形県の生まれ。本名は林次郎。代表作は『滝口入道』（一八九四）。のち二高教授。
- 土井晩翠（後述）
- 河東碧梧桐（一八七三―一九三七）・高浜虚子（一八七四―一九五九）ともに松山生まれ。明治二七年（一八九九）の制度改革に伴い第三高等学校から第二高等学校へ転入するが、一年も経たずに中退した。
- 大須賀乙字（一八八一―一九二〇）俳人。福島県の生まれ。本名は績。
- 山口青邨（一八九二―一九八八）俳人。岩手県の生まれ。本名は吉朗。
- 久板栄二郎（一八九八―一九七六）劇作家。宮城県岩沼町生まれ。
- 富永太郎（一九〇一―一九二五）詩人。東京の生まれ。

本稿では仙台に生まれ育った、また仙台で学び、あるいは教えた文学者たちが残した文学作品に描かれた仙台の姿を検証する。具体的には、土井晩翠（一八七一―一九五二）の詩「広瀬川」（明治三二）、島崎藤村（一八七二―一九四二）の詩「草枕」（明治三〇）、真山青果（一八七八―一九四八）の小説「南小泉村」（明治四〇）、そして魯迅（一八八一―一九三六）の小説「藤野先生」（一九二六）を取り上げる。生年を見れば分かる通り、最年長の晩翠から最年少の魯迅まで年齢差は十歳であり、作品に描かれているのはすべて明治三〇年代の仙台およびその近郊である。彼らが描いた仙台像を通して、仙台とは如何なる街なのか、また作家の性質・感性によって文学は如何に形を変えるのか、ということを考えてみたい。

### 土井晩翠の仙台

晩翠こと土井林吉は明治四年（一八七一）仙台の北鍛冶町に生まれた。実家は代々七郎兵衛を名乗る裕福な質屋であり、長男として生まれた彼は家業を継ぐ運命にあつた。祖父の言により進学を諦めて家業の見習いに励むが、明治二一年、希望が叶って第二高等学校補充科二年に入学する。五年後の明治二六年六月、二高の校友会誌『尚志会雑誌』が創刊され、林吉青年は「晩翠生」の号を用いて長詩「謫居」を発表した。詩人「土井晩翠」の誕生である。

翌二七年七月、晩翠は二高を卒業して上京、九月に東京帝国大学文科英文学部に入学した。在学中、『帝国文学』の編集委員となり、編集に従事する傍ら詩を発表した。明治三〇年七月に大学を卒業して大学院に進学すると、翌三一年には『帝国文学』や『反省雑誌』に詩を数多く発表するようになる。久保忠夫は「この年にいたって晩翠の詩

はピークに達したもののようである」<sup>(1)</sup>と述べている。

さて、この年八月の『反省雑誌』に「夕の声」の総題のもとで発表された一篇が「広瀬川」である。七五調六句を一聯として四聯からなるこの詩をすべて引用したい。

都の塵を逃れ来て  
今わが帰る故郷の  
夕涼しき広瀬川  
野薔薇の薫り消え失せて  
昨日の春は跡も無き  
岸に無言の身はひとり。

時をも忘れ身も忘れ  
心も空に佇ずめば  
風は涼しく影冴えて  
雲間を洩るゝ夏の月  
一輪霞む朧夜の  
花の夢いまいづこぞや。

憂よ思よ一春の  
過ぎて跡なき夢のごと  
にがき涙もおもほへば  
今に無量の味はあり  
浮世を捨てゝおくつきの  
暗にとこしへ眠らんと  
願ひしそれも幸なりき。

流はゆるし水清し  
楽の、光の、波のまに  
すゞしく澄める夜半の月、  
あゝ自然の心こゝろにて  
胸に思のなかりせば  
楽しかるべき人の世を

詩は文藝作品でありフィクションであるゆえ、この作品に登場する「われ」をそのまま作者土井晩翠と短絡するのは憚られねばならない。しかし、「広瀬川」が「故郷」に流れているということを考えると、この「われ」と作者とは限りなく近い設定にあ

ると考えてよからう。広瀬川は仙台市内を流れる清流であり、仙台市民にとつての「母なる川」である。

さて、「われ」は「都の塵を逃れ」て「故郷」仙台へ帰り、母なる「広瀬川」の岸にひとり黙って「心も空に佇」んでいるのであるから、「故郷」は塵（「砂塵」）であると同時に「俗世間のわずらわしさ」「世俗の汚れ」でもあると考えられる。のない清浄な空間であるということになる。しかし、その「故郷」にもはや「昨日の春は跡も無」く、「雲間を洩るゝ夏の月」が輝いているのである。この「春」は四季の一つであると同時に、「野薔薇の薫り」に満ちた人生の「春」を指していると思われる。換言すれば「人生における春」すなわち「青春時代」がすでに失われ、今や「人生の夏」すなわち「壮年期」に差し掛かってしまったことを歌っているのである。なお、この詩に注釈を施している久保氏は「夏休みの帰省であろう」とするが、前述の通り詩を虚構と考えれば必ずしも作者の帰省の場面と限定する必要はなからう。

仮に「われ」を晩翠その人としてみたとき、明治三十一年に数え二十八歳だった晩翠は仙台の広瀬川に佇んで「人生の春」の終わりを感じていたことになるが、この前々年にあたる明治二十九年から約一年間、仙台の地にて「人生の春」が確かに訪れるのを感じていた文学者がいた。仙台神学校から名称を変更したばかりの東北学院に勤めていた藤村こと島崎春樹がその人である。

#### 島崎藤村の仙台

藤村こと島崎春樹は明治五年（一八七二）、筑摩県馬籠村（現在の岐阜県中津川市馬籠）に生まれた。生家は江戸時代に本陣、庄屋、問屋をかねた旧家であった。同一四年（一八八一）九歳で兄とともに上京し、同郷の吉村家に寄宿しながら日本橋の泰明小学校に通う。同一〇年、明治学院普通部本科に入学し、翌年木村熊二（一八四五—一九二七）から洗礼を受けた。同一四年に明治学院を卒業して翌年、木村が開いた明治女学校の教師となる。さらに翌二六年一月、雑誌『文学界』の創刊に参加した後、明治女学校を辞職して放浪の旅に出、明治二十九年に仙台へ赴任したのであった。

藤村の仙台時代については、藤一也の『島崎藤村の仙台時代—『若菜集』をめぐって』（萬葉堂書店、昭和五二・九）が詳しい。藤氏の作成した詳細な年譜より一部を引用する。

明治二十九年（一八九六）二五歳

九月四日 東北学院教師として仙台に着任。駅前旅館「針久」支店に投宿する。

九月一日（金） 第二学期始業式。藤村、初めて生徒に紹介される。

九月一九日（土）—二〇日（日） 布施淡（池雪）と共に松島に遊ぶ（「松島だより」）。この頃、既に居を布施淡の家（池雪庵）の一室に移していたものと思われる。

この月（二〇月）初旬、淡の家族と共に支倉町一〇番地の田代家の隠宅に移る。一〇月二四日（土） 出村悌三郎「引用者注—東北学院の同僚」と散策し、賢淵「同—広瀬川の淵」の茶屋一見亭で秋の一日を楽しむ。「中略」帰宅して「ハ、ビヤウキスグコイ」の電報を見、急遽夜行にて上京。

一〇月二五日（日） 母縫子、コレラのため東京本所の避病院にて死去。

一〇月三二日 母の遺骨を持ち中津川をへて馬籠に帰る。

十一月七日（土） 小諸義塾の木村熊二のもとへ。そこに一泊。

十一月八日（日） 小諸より仙台へ向けて発つ。

帰仙後、間もなく名懸町六二番地（現在の名掛丁二〇番地）の旅宿兼下宿屋の三浦屋に宿を移す。

明治三〇年（一八九七）二六歳

この頃「引用者注—一月中旬」、「土井晩翠（当時東大生）に伴われ高山樗牛にあり。二高には高山樗牛、佐々醒雪などの知名な文学者が、河北新報には佐藤紅緑がいた。

二月二一日（日） 詩集『若菜集』出版を決意し、そのため、一関の熊谷太三郎「引用者注—かつて家庭教師として英語を教えた人物」より、三十円の借金をする。

六月二六日（土） 在仙詩人ら、やがて東京に帰る藤村のため、送別の宴を「陸奥の園」（南町通り）にて行う。

七月一日（木） 夜行にて離仙上京す。在仙の文士数十名がこれを仙台停車場に見送った。

藤村は『文学界』の明治三〇年二月号に「草枕」を発表した。七五調四句を一聯として三十聯から成る長詩である。言うまでもなく「草枕」とは旅などを意味する言葉であり、また旅などにかかる枕詞でもある。藤村は「草枕」という言葉が好きだったようで、本詩のほかにも同名の詩を発表している（『文学界』明治二十七年一月号と『新小説』明治三十三年三月号）。また、「小諸なる古城のほとり」（原題「旅情」、初出『明星』明治三三・四）の最終句「草枕しばし慰む」は人口に膾炙している。

作品の評価は毀誉褒貶相半ばしているが、とにかく『若菜集』および藤村の代表作というのはいずれも一致するところである。

さて、作品の冒頭「われは千鳥にあらねども／心の羽をうちふりて／さびしきかたに飛べるかな」と、自分は千鳥ではないが、千鳥のように「さびしきかたに飛」んだと言う。晩翠の場合と同様、「われ」即作者・藤村と考えるのは戒めなければならぬが、この場合も「われ」と作者との距離はほとんどないものと考えてよいだろう。

されば落葉と身をなして

風に吹かれて飄り  
朝の黄雲にともなはれ  
夜白河を越えてけり

道なき今の身なればか  
われは道なき野を慕ひ  
思ひ乱れてみちのくの  
宮城野にまで迷ひきぬ

心の宿の宮城野よ  
乱れて熱き吾身には  
日影も薄く草枯れて  
荒れたる野こそうれしけれ

ひとりさみしき吾耳は  
吹く北風を琴と聴き  
悲み深き吾目には  
色彩なき石も花と見き

あゝ孤独の悲痛を  
味ひ知れる人ならで  
誰にかたらん冬の日の  
かくもわびしき野のけしき

都のかたをながむれば  
空冬雲に覆はれて  
身にふりかゝる玉霰  
袖の氷と閉ぢあへり (第八一三三聯)

「さびしきかた」とは「みちのく」東北方面であり、「われ」は「白河を越えて」「みちのくの宮城野にまで迷ひき」たのであった。宮城野は「心の宿」と呼ぶにふさわしい場所ではあるものの、「ひとりさみし」く「孤独の悲痛」を感じている（「われ」は、東京が恋しくて「都のかたをなが」めてしまうのであった。仙台で作った詩稿を毎月のように『文学界』へ送っていた藤村の目は、やはり東京を向いていた。

ところで、「心の宿の宮城野」という章句は改訂版『藤村詩集』（春陽堂、大正元・一二）の「改訂詩集の序」や、それを改訂した『藤村詩抄』（岩波書店、昭和二・七）

の序「抄本を出すにつきて」において引用されており、藤村を論じるにあたって必ずと言ってよいほど触れられるものである。念のため、前者の一部を確認しておく。

明治二十九年の秋、私は仙台へ行つた。あの東北の古い静かな都会で私は一年ばかりを送つた。私の生涯はそこへ行つて初めて夜が明けたやうな気がした。私は仙台の客舎で書いた詩稿を毎月東京へ送つて、その以前から友人同志で出して居た雑誌『文学界』に載せた。それを集めて公にしたのが私の第一の集だ。

そして前述の第一〇・一一聯が引用されて「私が一生の曙は斯様な風にして開けて来た」とする。同様の趣旨の文は散見され、例えば昭和一年刊行の『早春』（昭和一一）では、「東北の方へ出掛けて行つて、漸くわたしは一切から離れることの出来る古い仙台の都会に身を置き得たやうな心地がした。この早春の記念の中にもあるやうに、まだ年若なわたしの胸によく浮かんで来たものは、『詩歌は静かなるところにて想ひ起したる感動なり』の言葉であつた。黙しがちなわたしの唇はほどけてきた。そして、これらの詩がわたしの胸から迸るやうに流れて来た」とも書いている。藤村にとつての仙台は、なにより「古い静かな都会」「静かなるところ」であつた。

#### 藤村と晩翠のその後

先に述べたように「旅」を意味する語を題とし、またその中で宮城野を「心の宿」と歌っていることから考えると、藤村は「草枕」を書いた時点、すなわち遅くとも明治三〇年の二月以前には、仙台を後にすること、言い換えればこの赴任をあくまで「宮城野行き」という「旅」にしてしまうこと、を考えていたと見て差し支えなからう。付け加えて言えば、先に挙げた「改訂詩集の序」においても、下宿三浦屋のことを「客舎」すなわち「旅館」と述べており、藤村が自身を能因—西行—芭蕉に連なる漂泊者の系譜に置いていたとしても、そういった観念以上に現実的にみちのく行きを一過性の旅と認識していたと考えることは否定できないであろう。そして、帰京した藤村は二年後の明治三二年、木村熊二が創設した小諸義塾の教師として信州へ向かつたのであつた。

藤村が仙台を離れた明治三〇年、晩翠は東京帝大を卒業し、大学院に進学している。藤村が「故郷」馬籠に比較的近い信州小諸に赴任した次の年、明治三十三年の二月に晩翠は母校・第二高等学校の教授として「故郷」仙台に戻る。彼は翌年六月から三七年一月にかけて三年半に亘つて西欧へ私費留学をするが、その後仙台に戻つて昭和九年（一九三四）の定年まで二高に勤続した。彼にとつて「故郷」仙台は住み心地の良い場所であつたのだらう。

藤村は明治三八年、小諸義塾を辞職して上京する。そして、詩から小説の創作に転じ、

貧困生活の中、問題作『破戒』（明治三九）を自費出版する。同作は、翌年発表された田山花袋の『蒲団』とともに、日本近代文学における自然主義文学の嚆矢と見なされていることは周知の通りである。彼はその後、『春』『家』『新生』『夜明け前』といった長篇小説を残し、近代文学史の中でも重きを置く小説家となつて行つた。

一方、晩翠も詩作をやめることになるが、彼は文芸の創作自体から離れ、英語教師・英文学者として残りの人生を送ることになる。そして昭和二年（一九四九）、K・S鋼の発見者である本多光太郎、赤痢菌の発見者である志賀潔とともに、初の「仙台市名誉市民」の称号を贈られた。翌二五年には、詩人としては初めて文化勲章を受章し、さらに翌年制定された文化功労者にもなつて行つた。

ところで、藤村は昭和二年（一九三七）六月一日、四〇年ぶりに仙台を訪れている。翌一七日には午前中、前年一月に八木山桜が岡の地（現在、八木山動物公園があるところ）に建立された詩碑（藤村の手による「草枕」の第一〇・一一聯が刻まれたもの）を見、夜は「春日」にて開かれた歓迎晩餐会に出席して晩翠と旧交を温めている。藤村は六年後の昭和一八年八月に満七一歳で亡くなり、この時が最後の仙台訪問、そして管見の限りでは最後の晩翠との邂逅となつた。

藤村の死から九年後の昭和二七年（一九五二）八月、晩翠の「荒城の月」詩碑が仙台城址に建立された。晩翠はこの二ヶ月後、満八〇歳で永眠する。

なお、藤村の詩碑は昭和四二年（一九六七）に八木山から青葉城址の晩翠の詩碑の近くに移され、さらにまた平成一九年（二〇〇七）九月に仙台駅東口の名掛丁「藤村広場」（藤村が下宿した三浦屋の跡地）に移された。昭和四〇年代から平成にかけての四十年間ではあつたが、明治三〇年代初頭に藤村と並び称され一世を風靡した仙台にゆかりのある両者の詩碑が、仙台の街を見下ろして立っているのには感慨深いものがある。「杜の都、仙台は日本の新詩体・近代詩発祥の地と言つてもよいかもしれぬ」と言う小松健一の言葉にも、諾うものがある。

### 真山青果の仙台

藤村が仙台を離れて上京し、晩翠が東京帝大の大学院に進学した明治三〇年、一八歳の真山彬青年は東京から仙台に戻り、第二高等学校医学部に入学した。

彼は明治一年（一八七八）、仙台の裏五番丁三番地に生まれた。父は小学校の校長を務めた教育者である。明治二四年、前述した東華学校に入学するが、翌年学校が宮城県尋常中学校へ発展的解消されたことにより同校の一年生となる。後に「民本主義」を提唱する政治学者・吉野作造（一八七八―一九三三。現、大崎市古川出身）や、横光利一ら大正末の新しい文学潮流を「新感覺派」と名付けた文藝評論家・千葉亀雄（一八七八―一九三五。酒田市生まれ、美里町小牛田出身）らが同級生だったが、落第を機に退学して東京の日本中学に編入した。仙台に戻つて第二高等学校医学部（東

北大学医学部の前身の一つ）に入学したものの長続きせず、明治三三年（一九〇〇）退学する。その後、郡立病院の薬局生や開業医の代診など職を転々とした。明治三六年（一九〇三）再上京し、佐藤紅緑の家に寄寓した。のち新潮社の記者となり小栗風葉の知遇を得る。藤村が『破戒』を発表した翌年の明治四〇年、「真山青果」の名で発表した「南小泉村」（『新潮』明四〇・五）が自然主義全盛の文壇に受け入れられ、小説家として認められるようになった。

「南小泉村」という村は実在しないが、彼は再び上京する前、仙台に隣接する「七郷村南小泉」で医師の代診を行つていた。その時の経験が「南小泉村」に盛り込まれている。

仙台の西北の隅から入つて、愛宕山の裾を南へ東へと流れるのが広瀬川、埋木と鮎で名高い川である。その川下の誓願寺の渡場から堰分れて、南方の町々を通つて東を指す枝川を六郷川と云ふ、南小泉はその又枝分れの小溝に沿つた小村で、その近傍の小字を併せて、今では六郷村に組入つて居る。戸数はやつと二百戸許、細長い家続き、土地が湿る所為か無花果が好くそだつ所である。「中略」米は水車屋から買つて喰べる――、田舎は田舎でも此辺は大抵一升買をして居る。その他の買物や何かは皆仙台の河原町を調法して居る。この辺ではか、ア、町と言慣して、鉄道線路を踏切つて行くと、十二三町とも無い位である。小学校の生徒は半分は仙台に、半分は吹曝の田圃を東路に一里ばかり、荒井と云ふ小村に行く、そこに六郷村の役場も駐在所もある。大きな町には、きつと、そこから吐出す芥川がある。つまり、町の老廃物を排泄するのだ。そして、最寄の小村は、大抵、その小川に沿つて部落する。南小泉村もやがてその一つである。百姓として独立の百姓では無く、多くは都会の下敷になつて生活を立て、居る。鄙しいのは素よりその筈だ。丁度其の居まはりの田畠が、町から流れ出る、湯の垢、染屋の紺汁、洗水、灰汁、塵埃に灌漑されるやうなものだ。「中略」（傍点ママ）

やはり（僕）を単純に作者・青果とすることは憚られなければならないが、実際に南小泉地区で代診をした経験があることから考慮すれば、（僕）と作者をほぼ同一視しても差し支えあるまい。

さて、南小泉は広瀬川の支流・六郷川から「又枝分れの小溝に沿つた小村」である。（僕）は広瀬川を「埋木と鮎で名高い川である」と言う（実を言えば、埋木で名高いのは広瀬川の本流である名取川なのだが、ここでその是非は問うまい）。その一方で、広瀬川が「町の老廃物を排泄」した「芥川」であることも指摘している。「老廃物を排泄する」という表現は、いかにも医学を学んだ人物にふさわしい。広瀬川は先に見たように、晩翠がその岸辺に佇んでロマンティックな詩情をかき立てた場所である。浪漫主義詩人の眼には美しく映つた広瀬川も、医学を学んだ自然主義作家の眼には「町



病気の患者を治癒することよりも、同胞が銃殺されるのを笑って眺めているような中国人の精神を改善させることの方が喫緊の課題であると感じた(私)は医学を捨て、やがて作家「魯迅」として文学の道を進むきっかけとなった。この劇的な場面は、第一小説集『呐喊』(一九二二)の「自序」以来、魯迅が繰り返し語るところであるが、真実か否かは評価が分かれるところである。しかし、仙台が世界的な文豪「魯迅」誕生のきっかけを作った町であることに異論はなからう。現在、仙台市博物館敷地内に「魯迅の碑」(一九六〇年設置)と「魯迅像」(二〇〇一年設置)、また東北大学の片平キャンパス内に「魯迅先生像」(一九九二年設置)がある。

#### まとめ

以上のように、本稿では仙台に生まれ仙台で亡くなった土井晩翠、仙台で教師として約一年を過ごした島崎藤村、仙台に生まれて仙台で学んだが、その後故郷には戻らなかった真山青果、そして仙台で約一年半学んで中国へ戻った魯迅の四人の文学者が、それぞれ残した作品の中で「仙台」をどのように描いて来たのか検証した。詩人の晩翠と藤村は歌枕的発想で浪漫的に仙台を美しく描いたが、青果は自然主義的な視点で仙台の暗部を描き出した。そして文豪「魯迅」は仙台で誕生したのであった。

現在、仙台には伊集院静(一九五〇)、熊谷達也(一九五八)、佐伯一麦(一九五九)、伊坂幸太郎(一九七一)らの作家が住んで、執筆活動に励んでいる。彼らもまた作品の中で彼らの「仙台」像を描いているが、それらについては稿を改めて論じてみたい。

#### 注

- (1) 久保忠夫編「年譜」(日本近代文学大系一八『土井晩翠・薄田泣菫・蒲原有明集』昭和四七、角川書店)
- (2) 久保忠夫「注」。注(1)に同じ。
- (3) 小松健一『カメラ紀行 文学の風景をゆく』(PHPエル新書、二〇一〇)
- (4) 榎本隆司編「年譜」(明治文学全集七〇『真山青果・近松秋江集』昭和四八、筑摩書房)

#### 主な参考文献(本文に挙げた以外のもの)

- 工藤英寿責任編集『ふるさと文学館 第五巻『宮城』』(一九九四、ぎょうせい)  
 金沢規雄『近代文学と仙台』I・II(一九六五、日曜随筆社)  
 同『二本のシラカシの木 近代文学と仙台』(一九九二、里文出版)

金沢規雄・横井博・浅野晃編『奥の細道とみちのく文学の旅』(一九八九、里文出版)  
 藤一也『島崎藤村「若菜集」の世界』(一九八一、万葉堂出版)

仙台における魯迅の記録を調べる会編『仙台における魯迅の記録』(一九七八、平凡社)  
 阿部兼也『魯迅の仙台時代 魯迅の日本留学の研究』(一九九九、東北大学出版会)

付記 それぞれ引用したテキストは、すべて工藤英寿責任編集『ふるさと文学館 第五巻『宮城』』(一九九四、ぎょうせい)に拠った。

なお小稿は、平成二十八年年度奈良工業高等専門学校公開講座「日本文学講座IX」第3回「近代文学と仙台」における講演をもとに大幅に加筆・訂正をしたものです。このような機会を与えてくださった関係教職員の皆様、そして拙い発表を聞いてくださった参加者の皆様に心より感謝申し上げます。